『キリスト教の教え』における肉の耳

—— *De Doctrina Christiana* 1.13.12 ——

加藤　武

序

二〇二一年秋、筆者は中世哲学会において「ことばと声 —— Dolbeau Sermon 293A Mainz における」と題し、アウグスティヌス『ドルボー説教A』における「ことばとは何か」について問うた。[1] 今回、教父研究会において『キリスト教の教え』*De Doctrina Christiana* 一・一三・一二における「音声とは何か」を問う。

第一章　『キリスト教の教え』の執筆事情

アウグスティヌスは、『再考録』*Retractationes* 二・四（三一）で『キリスト教の教え』についてこう語っている。

> 私は、『キリスト教の教え』という書を完成していないことに気づくと、この書はこのまま置いて、別の書物の校訂に移る方が良い、と思いました。[2]

ここで「『キリスト教の教え』という書を完成していない」とあるのは、『キリスト教の教え』の序章から第三巻、第三五章、四一節までが三〇六年から三九七年（中期）に書かれているのに、第三巻の残りの部分と第四巻が四二六

年（後期）に完成していることを指している。中断はこの時期にドナティストの文法学者、ティコニウス Tyconius（三八〇―三九〇に盛期）の『規則の書』*Liber Regularum* が刊行され、アウグスティヌスがそこに述べられる七つの規則を『キリスト教の教え』の本文に挿入しようとしたためである。[3] この中断の理由を最初に指摘したのは、C・カンネンギーサー Charles Kannengiser であり、彼は、一九九五年に Notre Dame University で開催された国際学会（筆者も参加した）において、《The Interrupted *De Doctrina Christiana*》と題し、中断の理由を問うた。また近年、K・ポルマン Karla Pollmann は、ティコニウスの同書における七つの「規則」regulae を詳細にとりあげ、分析した。[4] ポルマンによれば、ティコニウスの解釈が文字に制約され、律法主義的であり、いささか生硬であるのに対し、アウグスティヌスの解釈は、自由であり、柔軟である、と言う。さらにポルマンは記号 signum を『キリスト教の教え』の中心テーマと見る大方の見解を批判しているが、筆者はポルマンに賛成である。なぜなら、アウグスティヌスは記号・徴表 signum を経て、記号の彼方なる〈もの〉res に至ろうとするのだから。

第二章　『キリスト教の教え』一・一三・一二のテキスト

アウグスティヌスは『キリスト教の教え』一・一三・一二でこう語っている。

【A】Quo modo uenit nisi quod uerbum caro factum est et habitauit in nobis?

知恵自身が来られたのは「ことばが肉となってわれらのなかに宿られた」（ヨハ一・一四）からでないとしたら何故であろうか。[5]

そしてこう続ける。

【B】Sicuti cum loquimur, ut id quod animo gerimus in audientis animum per aures carneas illabatur, fit sonus uerbum quod corde gestamus, et locutio uocatur.

われわれが話すときこころにいだくこと quod animo

gerimus が、《肉の耳》を通して聞き手のこころに滑りこむ。するとこころにいだくことば uerbum corde gestamus が音声となって、発語 locutio と呼ばれる。[6]

ここで「いだく」と訳した動詞 gerimus と gestamus に着目しよう。gero は、《身に纏う、着ること》、gesto は《運ぶこと》を意味する。ここではキリストが受肉した事実を述べるが、なぜ受肉したかの理由にはまだ触れていない。これは《予告》である。筆者はここで「発語 locutio と呼ばれる」と訳したが、須藤英幸氏はその著書の中でこの箇所を引用し、「……われわれが話す loqui とき、……そして、それが表現 locutio と呼ばれる」と、loqui と locutio の緊密なつながりに留意して「表現」と訳しておられる。[7] これが loqui と locutio を結ぶ言い回しであることに気づかされた。ただし須藤氏のように「表現」と訳すと、「書かれた表現」ととられるおそれなしとしない。むしろ「音声表現」と訳せば、oral utterance であることが、より鮮明になるのではないか。

loqui、locutio の初期の使用例が『教師』*De Magistro*（三八九年）一・一に三箇所ある。

1. Aug. Unum horum uideo et adsentior, nam loquendo nos docere uelle manifestum est, discere autem quomodo?
アウグ：それらのうちのひとつはわたしにも分かり、またそうだと思う。なぜかというと、語ることによってわれわれは教えることを欲していることが分かるから。だが、学ぶことはいかににしてだろうか。

2. Aug. uides ergo iam nihil nos locutione, nisi ut doceamus adpetere?
アウグ：いまや語ることよってわれわれは教えることを望む以外にない。君は分かるね。

3. Ad. nam si nihil est aliud loqui quam uerba promere, ...
アデオ：……つまり語るとはことばを発することより他にない、としますと……[8]

P・キング Peter King は、「ことばを発する」uerba promere を uttering words と訳し、[9] G・マデック Gou-

levin Madec は、prononcer des paroles と訳す。[10] いずれも loqui という語の意味の側面よりも音声の側面に着目している。

またアウグスティヌスは『問答法』*De Dialectica*（三八七年）第五章で言う。

> Loqui est articulata uoce signum dare.
>
> 語る loquor とは、分節された音声 articulata uox によってしるし signum を与えることです。[11]

この『問答法』の loqui もまた、『教師』の loqui、locutio と同様に、loqui という語の音声の側面に触れている。

だが、中期の『キリスト教の教え』に至ると、アウグスティヌスは loqui、locutio を新たな仕方で捉えるに至る。『キリスト教の教え』一・一三・一二の前掲【B】の直後の箇所で彼はこう語る。

> 【C】Nec tamen in eundem sonum cogitatio nostra conuertitur, sed apud se manens integra forma uocis qua se insinuet auribus sine aliqua labe suae mutationis assumit, ita uerbum commutatum caro tamen factum est ut habitaret nobis.
>
> けれどもわれわれが考えたことがこの音に変わるのではなく、考えたことはそのままでそっくりとどまり、声の形 forma uocis をとり、声によって耳に入りこむが、声になるという変化によってすこしも損なわれることがない。ちょうどそのように、変ることのない神の言葉は肉となってわれわれのところに宿ったのである。

この一連の箇所（【A】〜【C】）は、アウグスティヌスが、ことばの問題を初めて《受肉》との関連において述べ、それとの関連でことばの《変化》に触れた重要な箇所である。彼の受肉についての理解は、『キリスト教の教え』のこの箇所（三九六年）に表明されてから後年の『三位一体』*De trinitate*（四〇〇—四二〇年）にいたるまで、すこしも揺らぐことなく一貫している。なお、『三位一体』における受

肉の表現は、多様な形で総計九回に及ぶ。[12]

われわれは、この箇所で「思考は音声を伴う」と捉えられていることに着目しなければならない。（なおアウグスティヌスは sonus と uox を完全には同一視していないことに注意しよう。）意味をもたない音声 sonus sine sensu が人間の《肉の耳》（身体の耳）に入りこむとき、意味をもつ音声、すなわち声 uox になる。ここでアウグスティヌスは、キリストの受肉 incarnatio において用いられる《僕の形》forma seruis（ピリ二・六―七）という聖書的表現を念頭に置きつつ、これを言語分析のモデルとして《声の形》forma uocis を述べている。forma seruis の forma は persona と言いかえてもよい。筆者は一九九五年、Notre Dame 大学における国際学会における発表の際、《声の形》forma uocis という表現についてこの私見を述べた。[13]

以上われわれは、アウグスティヌスの初期著作――『教師』および『問答法』――においては loqui、locutio の音声としての側面が着目されているのに対し、中期の『キリスト教の教え』一・一三・一二においては、ことばの問題がキリストの受肉との関連で述べられていることを見た。

そこで次にわれわれは、アウグスティヌスの受肉理解の特徴を明らかにするべく、テルトリアヌスの受肉理解を見ることにしよう。

第三章　テルトリアヌス『キリストの肉について』における受肉理解

三世紀の哲学者、カルタゴの司教テルトリアヌス（二二〇年頃死去）は一九三年頃、ローマにおいてキリスト教に改宗した。その後、生地カルタゴに戻り、師ヒエロニムスを継いで司教になった。彼は、哲学、法律、ギリシャ語とラテン語に通暁しており、多産の著述家（四十二冊に及ぶ）であった。クァステン J. Quasten はテルトリアヌスを「アウグスティヌスは例外として、もっとも重要でもっとも独創的なラテン作家」と評価している。[14]

テルトリアヌスは、『キリストの肉について』*De carne Christi* において魂と肉について定義を述べているが、われわれは、当時、キリスト教徒たちが殉教の渦中にあったことを念頭に置く必要がある。彼は、『殉教者たちへ』*Ad martyres*（二一二／二一三年頃）と『迫害下の逃亡について』

De fuga in persecutione（二一二年）という書物を書いているが、この事実からすると、テルトリアヌスの魂と身体の定義は、単なる抽象的思弁でないことが分かる。われわれは、拷問を受けてもなお、復活時における心身の全き回復を固く信じ、切に希求するキリスト教徒たちの置かれた時代的・社会的背景を考えなければならない。[15]

テルトリアヌスは、『キリストの肉について』一〇で言う。

> Conuertor ad alios aeque sibi prudentes qui carnem Christi animalem affirmant, quod anima caro sit facta, ergo et caro anima, et sicut caro animalis, ita et anima carnalis.
>
> 魂が肉になり、したがって肉が魂になり、そして肉が魂を持つものになったように魂が肉的なものになったのですから、私は、キリストの肉が魂をもつものであることを肯定する他の人々、みずからに対して賢慮ある人々の方へと向かいます。

これはテルトリアヌスが《魂》と《肉》とは「なにか」、また「どのようにであるか」を定義する枢要な箇所である。われわれは、このテキストにおける二つの述語表現に着目したい。

1. 動詞、《なった》sit facta: この表現は、AからBへの本質の変化 turn out を示す。
2. 形容詞、《魂をもつもの》animalem: この表現は、これが修飾する名詞がいかなるものによって構成されているか composed、すなわちその名詞の構成要素を示す。

これらの表現からすると、テルトリアヌスはキリストの受肉を《変化》として捉えていることが分かる。つまりキリストは、肉をまとって物体的世界に受肉したとき、みずからの本質を変化させたのである。

第四章　アウグスティヌス『三位一体』における受肉理解と《ことば》

そこでわれわれは次に、このようなテルトリアヌスの受

肉理解を念頭に置きつつ、アウグスティヌスがことばの問題をキリストの受肉との関連でどのように見ているのかを、後期の『三位一体』においてさらに見ることにしよう。

アウグスティヌスは『三位一体』一五・一〇・一七でこう語っている。

> Nam etsi uerba non sonent, in corde suo dicit utique qui cogitat. ... Et cum uidisset Iesus cogitationes eorum dixit: Vt quid cogitatis mala in cordibus uestris?
>
> なぜなら、たとい発語されない場合でも、思考している限り心の中で語っているからである。……「イエスは彼らの考えを見て、彼らに言われた。『何故、あなた方は心の中で悪しきことを考えるのか』と」。（マタ九・四）[17]

さらに『三位一体』一五・一〇・一八冒頭で言う。

> Quaedam ergo cogitationes locutiones sunt cordis ...
>
> それゆえ、ある種の思考は心が語ること（locutiones cordis）である。[18]

これらふたつの箇所は、人間がみずからの心の中に in corde suo 有する思考 cogitationes について語っている。人間が有する思考は、いまだ音声の形をとっていないとしても、すでに心の《ことば》locutiones cordis なのである。

この心の《ことば》は発語行為によって音声となる。『三位一体』一五・一一・二〇において言う。

> Proinde uerbum quod foris sonat signum est uerbi quod intus lucet cui magis uerbi competit nomen. Nam illud quod profertur carnis ore uox uerbi est, uerbumque et ipsum dicitur propter illud a quo ut foris appareret assumptum est. Ita enim uerbum nostrum uox quodam modo corporis fit assumendo eam in qua manifestetur sensibus hominum sicut uerbum dei caro factum est assumendo eam in qua et ipsum manifestaretur sensibus hominum. Et sicut uerbum nostrum fit uox

nec mutatur in uocem, ita uerbum dei caro quidem factum est, sed absit ut mutaretur in carnem.

外に響く言葉は内にきらめく（intus lucet）言葉のしるしであり、この内なる言葉こそ、言葉という名にふさしいのである。なぜなら肉の口から出るものは言葉の音声であるが、この音声自体が言葉と言われるのは、内なる言葉が外に現れ出るために受けとられるからである。すなわち、私たちの言葉が知覚に明らかにされるために音声を受けとり、それによって身体から出る声となるのであるが、これは神の言が人間の知覚に明らかになるべく、肉を受けとり肉になったことに比せられるのである。けれども私たちの言葉が音声となっても音声に変わるのではないと同じく、神の言は肉となっても肉に変わるのではない。[19]

まずわれわれは、テキスト末尾の「けれども私たちの言葉が音声となっても音声に変わるわけではないように、神の言は肉となっても肉に変わるのではない」という語に注目しよう。

みずからの心の中に有する思考は、発語 locutiones によって《音声》uox となる。だが、そのときであっても、心の中の思考はそのまま心の中に留まっており、《変化》をこうむることがない。この事態は、「神の言葉は肉となっても肉に変わるわけではない」という受肉の事態と同様である。

このようにアウグスティヌスは、『三位一体』において、思考の音声への変化を受肉との類比でとらえ、思考の音声への《変化》を否定している。

だがわれわれは、すでに『キリスト教の教え』において、この考え方に出会っていた。『キリスト教の教え』一・一三・一二で言う。

【C】けれどもわれわれが考えたことがこの音に変わるのではなく、考えたことはそっくりそのままとどまり、声の形をとり、声によって耳に入りこむが、声になるという変化によってすこしも損なわれることがない。このように変化しない神の言葉は肉となってわれわれのなかに宿ったのである。

したがって、アウグスティヌスが『三位一体』一五・一一・二〇で語る《ことば》の捉え方――思考の音声への変化を受肉との類比でとらえ、思考の音声への《変化》を否定するという捉え方――は『キリスト教の教え』一・一三・一二の延長線上にあるものと言える。すなわち、

1. ……けれどもわれわれが考えたことがこの音に変わるのではなく、考えたことはそっくりそのままとどまり、声の形をとり、声によって耳に入りこむが、声になるという変化によってすこしも損なわれることがない。『キリスト教の教え』一・一三・一二
2. けれども私たちの言葉が音声となっても音声に変わるのではないと同じく、神の言は肉となっても肉に変わるのではない。『三位一体』一五・一一・二〇

これら二つのテキストは、

1. われわれの思考 cogitationes は音声となっても、音声に《変化》するのではない。
2. 神の《ことば》は受肉によって肉に《変化》するのではない。

ということを述べている点で一致するのである。

このように見てくると、アウグスティヌスが言語論との類比において語る「神の言葉の受肉」の考えは、「受肉前の言葉の受肉後の言葉への《変化》を認めない」という点で、テリトリアヌスの受肉理解とは根本的にへだたりがあることが分かる。テルトリアヌスの《変化する》という考えは、仮現論的キリスト論を擁護したマルキオン Marcion[20]を相手に厳しく論駁した[21]おりの、無理もない勇み足！であったのではないか。

以上われわれは、『キリスト教の教え』と『三位一体』とに共通する「《ことば》と《受肉》の類比」について見て来た。だが『三位一体』は、「音声のとらえ方」という点では『キリスト教の教え』とは異なっている。先に引用した『三位一体』一五・一一・二〇の冒頭は次のようになっていた。

外に響く言葉は内にきらめく（intus lucet）言葉のしるしであり、この内なる言葉こそ、言葉という名にふ

さしいのである。

ここでは、「外に響く言葉」としての音声は「内にきらめく言葉のしるし」signum uerbi quod intus lucet とされ、音声よりも内なる言葉としての思考に焦点があてられている。

そしてこの「内にきらめく言葉」の強調は、前掲『三位一体』一五・一一・二〇のテキストの少し後の箇所の次の語によってさらに明確になる。

> Perueniendum est ergo ad illud uerbum hominis, ad uerbum rationalis animantis, ad uerbum non de deo natae sed a deo factae imaginis dei, quod neque prolatiuum est in sono neque cogitatiuum in similitudine soni quod alicuius linguae esse necesse sit, sed quod omnia quibus significatur signa praecedit et gignitur de scientia quae manet in animo quando eadem scientia intus dicitur sicuti est.

それゆえ、私たちは人間の言葉、すなわち理性的動物［である人間］の言葉、神から生まれたのではなく神によって造られた、神の似像である人間の言葉にまで至らなければならない。これは音声として発せられることなく、音声による似像と思考されるもの――それはかならず特定の言語にぞくする――ではなく、言葉が表示するすべてのしるしに先行し、心の内に保持されている知識から、この知識が私たちの内であるがままに語られたときに生まれるのである。(22)

われわれがすでに見たように、中期の『キリスト教の教え』一・一三・一二においては、「思考は音声を伴う」とされ、音声の位置が前面に出ていた。これは『教師』や『問答法』といった初期著作の延長線上にある考え方である。だが後期の『三位一体』になると、音声は背後に退き、《内なることば》（＝内にきらめくことば uerbum quod intus lucet）としての思考 cogitationes がもっぱら強調されることになる。つまり『三位一体』は「音声のとらえ方」という点において『キリスト教の教え』よりも後退しているのである。

第五章　結びにかえて

報告の要旨を結論として記すのでなく、『キリスト教の教え』一・一三・一二においてアウグスティヌスが音声をいかに捉えているかを述べよう。

1. アウグスティヌスは、『キリスト教の教え』一・一三において「われわれが話すときこころにいだくことと quod animo gerimus が、《肉の耳》を通して聞き手のこころに滑りこむ。するとこころにいだくことば uerbum corde gestamus が音声となって、発語 locutio と呼ばれる」と述べ、音声を高く評価している。

2. だが彼は、『三位一体』一五・一一・二〇において、「それゆえ、私たちは人間の言葉、すなわち理性的動物［である人間］の言葉、神から生まれたのではなく神によって造られた、神の似像である人間の言葉にまで至らなければならない。これは音声として発せられることなく、音声による似像と思考されるもの――それはかならず特定の言語にぞくする――ではなく、……」と言い、音声の価値を否定する。このように、後期の『三位一体』においては、人の音声を神の言葉との類比 analogia において捉えているが、中期の『キリスト教の教え』の音声評価から見ると、音声理解は、大きく後退した。

3. アウグスティヌスは、『キリスト教の教え』一・一三・一二において、受肉を、神学的にというよりも、言語論的に捉えている。テルトリアヌスの受肉の理解は、ロゴス的、哲学的であるが、アウグスティヌスのそれは、言語的、言語哲学的である。

4. 『キリスト教の教え』一・一三においては、《着る、纏う、身に帯びる》gero と《運ぶ》gesto といった動詞が注意深く用いられている。これは緊密性、一体性を微妙に表現する。

5. テルトリアヌスは、『肉について』において、受肉における魂と肉（身体）の《変化》を見た。けれどもアウグスティヌスは、『キリスト教の教え』においても、

『三位一体』においても、「けっして魂が肉に変わるのではない」と見ており、受肉の理解の上で、両者には根本的なへだたりがある。

（立教大学名誉教授）

註

（1）『中世思想研究』第六四号、二〇二二年九月、一三三―一四七頁。

（2）*Retr.* 2.4 (31) Libros *De doctrina christiana*, cum imperfectos comperissem, perficere malui quam eis sic relictis ad alia retractanda transire.

（3）ティコニウスの『規則の書』、およびそこに述べられる七つの規則については、『キリスト教の教え』三・三〇・四二―三・三七・五六、および筆者による解説、アウグスティヌス『キリスト教の教え』加藤武訳、アウグスティヌス著作集六、一九八八年、教文館、三九七―四〇〇頁を参照。

（4）《DE DOCTRINA CHRISTIANA―Untersuchungen zu den Anfängen der christlichen Hermeneutik unter besonderer Berücksichtigung von Augustinus, De Doctrina Christiana―1996 Freiburg 7, Augustinus Rezeption der Hermenutik des Tyconius in DC》3, 30-37.

（5）アウグスティヌス『前掲書』四一頁。

（6）『同上』。なお、以下《言葉》を《ことば》に、《心》を《こころ》に統一する。

（7）須藤英幸『「記号」と「言語」――アウグスティヌスの聖書解釈学』、二〇一六年、京都大学学術出版会、第三章、一一八頁。

（8）loqui については、以下、注9、10を参照せよ。

（9）Augustine, *Against the Academicians and The Teacher*, Translated, with Introduction and Notes by Peter King, Hacket Classics, 1995, Kindle Edition, p. 2386.

（10）Oeuvres de Saint Augustin, 6, Dialogues Philosophiques, *De Magistro―De Liber Arbitrio*, Desclée de Brouwer, 1976, p. 43.

（11）訳は筆者。

（12）*De trinitate* 1.5.8-1.6.9; 1.7.14; 1.13.20; 1.2.9; 2.10.17; 4.3.6; 4.21.31; 13.8.12; 13.17.24.

（13）Takeshi Kato, Sonus et Uerbum ― *De Doctrina Christiana*, 1, 13, 12―, in De Doctrina Christiana―*A Classic in*

Western Culture—, edited by D.W.H.Arnold and Pamela Bright, Notre Dame and London 1995, pp. 87-94.

（14）Charles Kannengieser, *Handbook of Patristic Exegesis*, vol.1, London/Boston 2004, p. 583.

（15）テルトリアヌス『殉教者たちへ』佐藤吉昭訳、中世思想原典集成4、初期ラテン思想、一九九九年、平凡社、九七―一一五頁。

（16）律法学者やファリサイ派の人たち。

（17）アウグスティヌス『三位一体』泉治典訳、アウグスティヌス著作集二八、二〇〇六年、教文館、四五九―四六〇頁。以下、『三位一体』からの引用の日本語訳は、泉治典訳による。

（18）アウグスティヌス『前掲書』泉治典訳、四六〇頁。

（19）アウグスティヌス『前掲書』泉治典訳、四六二―四六三頁。

（20）『マルキオン駁論』*Contra Marcione*。

（21）『肉について』第三―四章。

（22）アウグスティヌス『前掲書』泉治典訳、四六四頁。

［付記］本論考は、教父研究会第一七六回例会（二〇二二年三月二六日）で行われたシンポジウム「アウグスティヌスの言語論――再考」における発表「声とことばについて――『キリスト教の教え』一・一三における――」をもとに執筆されたものである。